

日本ボーイスカウト北海道連盟だより

147号



# 斧の響き



新春に想う～隊・団の現状を見つめ討議を～  
＝指導者の役割を考えよう＝

日本ボーイスカウト北海道連盟  
理事長 長岡 正彦

健康維持のため、毎日1万歩以上歩き、街角で季節の移ろいを楽しんでいます。ある時、数人のスカウトたちの活動に出会いました。

先頭は地図を見ながら歩いているボーイ、その後には時々、「ストップ」と大きな声をあげ何やらスケッチをしているカブとビーバー、その間を行き来しているベンチャー。

後ろでにこやかにスカウトたちを見守っている隊長に話を伺うと、「各部門の観察ハイクをしています。ボーイは班長が決めたコースで地図を読み取りながら歩き、野帳を記入します。カブは街角の樹木や家の庭に咲いている花など興味を持ったものをスケッチして、次の集会の時に図鑑などで名前や特性を調べます。ビーバーは何でもいいから“おやっ”と思ったことをスケッチして、それは何なのかとベンチャーに教えてもらいます。（この時は家の床下から逆L字型に出ているガス管に興味をもちスケッチしていました。ビーバーから思わぬ質問が寄せられ、ベンチャーがあわてふためくことがままあるとのことでした。）自分が所属している団は、スカウトも指導者も少ないので、時々このような各部門の特性を活かした異年齢の相互学習による合同のプログラムを組んでいます。」とのことでした。

昨年1月、北海道連盟会館での前泊を含めて3泊4日の日程で11名のベンチャースカウトが、『「ふくしま」体験・交流・語り部活動』を行いました。

この事業を企画した発端は、ある指導者が北海道連盟事務局を訪れた際に、

「3・11東日本大震災で北海道のスカウトたちは自らの発想で“タオルを贈る運動”を行って、被災地の方々に大変喜ばれたと聞いている。しかし、ボーイスカウトで行う活動は単発で継続性に欠けているのではないか。

福島にいる知人から、3・11から間もなく2年になろうとしているのに、未だ放射線量の影響を受けている人たちや、仮設住宅で不便な生活を送っている人たちが多くいると聞いたが、世の中の感心は薄れ風化している。被災地以外の人達、特に若い人達が現地を訪れ現実を見て欲しいものだ、と聞いた。

東日本大震災に関する継続的な事業を行い、スカウトたちに貴重な経験と、考える機会を提供できないだろうか。」

と話されたのをヒントに、地区コミッショナー研究集会や理事会で承認を得て、福島連盟のご協力をいただいて実施しました。

この事業の内容は、参加したスカウトたちの感動的な報告書が北海道連盟のホームページに載っていますのでご覧ください。

北海道フォーラム、全国フォーラムでスカウトたちは熱心な討議を重ねて提言が行われていますが、実際の活動に結びついた展開がなされていませんでした。

一昨年北海道と全国のフォーラムでスカウトたちから提言された「3・11を受けて自ら生き抜く術を学

ぶサバイバルキャンプ」をどのように具体化するかを指導者間で論議している時に、スカウトたちは方法論として「サバイバルキャンプ」を提言しているが、その背景にある“自然の恵み・自然の脅威”“自然と共に生きる”ことを気付かせ、体験できる活動を提供することができないかと議論が深まり、ある指導者から「自分が長い事、関心を持って調べているアイヌ生活文化から学ぶことがあるのではないか」との提案で、昨年9月の「アイヌ生活文化に学ぶ～北海道ベンチャーのつどい～」を企画・実施しました。

この活動報告書も北海道連盟ホームページで紹介していますので、ご覧ください。

ある地区を訪問した際、懇親会の時にどの指導者も「スカウトたちは成人指導者の姿を見て育っているのだ」と語り、指導者間で部門の垣根を越えてスカウトの名前を呼び、スカウトたちの事を語り合っている姿に感銘しました。

ボーイスカウト教育運動の特質に「青少年の自発活動」「行うことによって学ぶ」がありますが、これらを促すのは、先に4つの事例を紹介しましたように成人指導者の社会的経験、人生経験に伴う才覚を活かして、スカウトに教える一方のみではなく、「学ばせる、知恵・ヒント、そして体験（行う場）をいかに提供するか」ということではないでしょうか。

そのため、指導者にはスカウティングスキルはもとより、幅広い人間性と才覚・企画力が求められていますが、これは特別なことではないのです。

一昨年、昨年実施した全道スカウティング研究協議会で行われたプログラム開発研究で同じ素材から多様なプログラムが企画された事に見られるように、それぞれの指導者が知恵を出し合うことにより、スカウトたちに豊かな活動を提供することができるのです。

金子みすゞの「私と小鳥と鈴と」を読んでみませんか。

私が両手をひろげても、  
お空はちっとも飛べないが、  
飛べる小鳥は私のように、  
地面を速くは走れない。

私がからだをゆすつても、  
きれいな音は出ないけど、  
あの鳴る鈴は私のように  
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、  
みんなちがって、みんないい。

スカウトも指導者もみんな違っていいのです。

しかし、違っていい中でそれぞれの特性を認め合い、活かし合うことが必要でしょう。

昨年10月「北海道のボーイスカウト運動推進中期展望」を発表し各隊に冊子を配付しました。

この「中期展望」を素材に隊・団の現状を見つめ語り合い、気づきの中から豊かな隊・団活動を展開しましょう。

平成26年は隊・団が独自の「活動目標」「教育目標」を設定し、普段の活動が何のために行われているかを明確にし、隊・団指導者が共通の認識をもって活動を行うことを要請します。

そして「北海道のボーイスカウト運動に風を吹かせましょう！！」

平成25年度  
北海道ベンチャーのつどい



自然に感謝して《生きる》  
～我々は何をなすべきか～

平成25年度の「北海道ベンチャーのつどい」は、従来と趣を変えて、平成25年9月21日（土）～23日（月・祝日）の2泊3日、白老町の「アイヌ民族博物館」「ポロトの森キャンプ場」を主会場に5地区8個団11名のスカウトが参加して開催しました。

開催にあたり「財団法人アイヌ民族博物館」「NPO法人ウヨロ環境トラスト」「ポロト自然休養林保護管理協議会」「しらおいイオル事務所チキサニ」の皆様にご多大なご協力を頂きお世話になりました。

《開催趣旨》

2011年3月11日の東日本大震災は、自然の脅威に対して私たち人間はいかに無力であるかを教えられました。また、原発事故にしても人間の叡智を重ねた科学技術も自然の威力にもろくも崩れ果てました。

道産子ベンチャーフォーラムでは、東日本大震災を教訓に自然の驚異に備えるサバイバルキャンプを行いたいとの決議文が採択されました。

この決議を受け、北海道に住むベンチャースカウトとして自然の脅威を知り自然に感謝する、アイヌの生活文化から『自然に感謝して《生きる》』ことを学びます。

アイヌは人間の力が及ばないもの、自然の恵みを授けてくれるもの、生きていくうえで欠かせないものなどを、神〔カムイ〕として敬っています。

自然界の神々―火の神、水の神、山の神、集落の神、森の神、狩猟の神、穀物の神等―に感謝し、営まれ伝承されている「アイヌの生活文化」を体験し、「我々は何をなすべきか」を体験的に考え行動します。

《日程・内容》

〔9月21日（土）〕 テーマ：自然と共生するアイヌ文化に学ぶ～土の恵みに祈りと感謝

日時	項目／講師	会場
10：30	開会式／オリエンテーション	アイヌ民族博物館
11：00	講話 『アイヌの自然観』 講師：アイヌ民族博物館学芸員	アイヌ民族博物館
13：00	フィールドワーク 『アイヌの有用植物観察』 講師：アイヌ民族博物館学芸員、イオル担い手研修員 『古式舞踊公演参加体験』	ポロト自然休養林 アイヌ民族博物館
17：30	『陸の恵み・陸の神の食事 アイヌ伝統料理調理・夕食』 指導：しらおいイオル事務所チキサニ の皆さん	ポロトの森キャンプ場

〔9月22日（日）〕 テーマ：自然と共生するアイヌ文化に学ぶ～鮭・鹿の恵みに祈りと感謝

09：00	『鮭の命に学ぶ』ガイド：NPO法人ウヨロ環境トラスト の皆さん 〔昼食〕『アイヌ伝統料理』	ウヨロ川流域ほか アイヌ民族博物館
13：30	アイヌの主食「鮭と鹿の恵みに学ぶ」アイヌ伝統工芸実技 『男の手仕事・女の手仕事～シカ笛づくり』 講師：アイヌ民族博物館 館長	アイヌ民族博物館
17：30	『川の恵み・川の神の食事 アイヌ伝統料理調理・夕食』 指導：しらおいイオル事務所チキサニ の皆さん	ポロトの森キャンプ場

〔9月23日（月）〕 テーマ：自然と共生するアイヌ文化に学ぶ～我々は何をなすべきか

08：30	『フォーラム～我々は何をなすべきか』	ポロトの森キャンプ場
11：30	閉会式／解散〔昼食〕	アイヌ民族博物館

9月21日・22日の「アイヌ伝統料理・夕食」後の『交流・ふり返り』と、9月22日・23日の8時から行われた『朝礼・点検』を始めとする2泊3日の生活は、アドバイザーを務めた2名のローバースカウトを中心に自主的な運営で行われました。

各プログラムの展開では指導をいただいた「アイヌ民族博物館」「NPO法人ウヨロ環境トラスト」「しらおいイオル事務所チキサニ」の皆さん方が、初めて会ったスカウト達に興味・関心を触発させ自主的に学ぶことができる指導をされましたことに深く敬服しました。

参加したスカウトの感想を、一部抜粋で紹介します。

小澤 翼 〔帯広第4団〕

自然を壊すのではなく、調和して生きようとする姿勢を見習うべきだと感じた。

現代人はすべてを自分達だけの思うとおりに進めている気がするが、こういった文化を失わせるのではなく、そこから学び、小さなことから考えを改めていけばよりよい社会になれるのではと、私は今回の活動を通じてそう考えるようになった。

伊藤 明香 〔帯広第4団〕

今回の活動を通して思ったことは、最近は何に頼りすぎた生活を送っているの、自然の物を使って生活することが大切だと思った。

何が入っているのかわからない物を食べるより、自然の物のほうが安全。

自然に逆らう生活は、人間にあまりよくない影響をあたえていると考えられるため、自然とふれあう活動が必要だと思われる。

小野 悟 〔函館第3団〕

今の人間、要するに自分たちは自然を支配しようとしていました。ですが、3年前の東北大震災で自然の恐ろしさを感じ、自然は自由にコントロールすることが出来ないということを知りました。

自分はこの活動で、自然と共存するのは不可能でも自然に感謝するということは出来ると思いました。だから自分は、いまは大きなことは出来ないから、今の自分の出来ることに手をさしのべて行こうと思いました。

桃井 大輔 〔富良野第1団〕

私は今回のベンチャーフォーラムで感じたことは、命の大切さです。

植物や鮭などを観察して、その後の食事に出されることで今まで命を持っていた物を食べていることをあらためて実感しました。

アイヌ民族は命一つ一つに感謝して自然と共存し現代では考えられない生活をしていてとても尊敬します。

今生きている人たちはこれを見習い、命のありがたさを学び、命と自然を大切に、感謝しながら生活すべきだと感じました。

佐藤 瑞季 〔函館第2団〕

今回は初めての参加だったけど、アイヌの生活のことを学べた。そして自分たちが、語り部をしていき広めるべきだと思った。

鮭の親をみて、自分の子を守るために自分の命を犠牲にするのがすごいと思った。自分も、仲間や友達を大切にしようと思った。

アイヌの人が、まだ普通にアイヌ民族として生きているのがすごいとおもった。

アイヌの衣食住に、似たような生活をしてみて少し過酷だとおもったけど、またやりたいと思った。少しでも、自分の身の回りのことを学ぼうとおもった。

## 加藤 利奈 〔帯広第4団〕

今回の活動で私が一番強く感じたことは、「人間は小さい」ということです。

人間は自然の力には勝てません。だから、自然を受け入れ、自然と共存していくことが大事だと思います。以前から問題視されている「食品ロス」。いまだに食べられる食品が大量に捨てられています。

これこそ、食べ物を与えてくれる自然に感謝を忘れていて。

物はすべて無限にあるわけではありません。このような無駄を続けるとどうなるか。私たちは、そのことを考え、必要な食材だけを計画的に購入し、使い切ることが大事です。

感謝する、ということを忘れず、物を大切に無駄なく生きていく。

それが、これから私たちがすること、しなければならぬことだと思います。

## 鈴木 博久 〔苫小牧第2団〕

自然の鮭は、とても綺麗で迫力がありました。そのなかでも特に凄かったのは、鮭の産卵です。

鮭が卵を産む場所を作るために雄と雌が協力して川底の砂利を掘り起こしていました。そして鮭は卵を産んだら雄も雌もすべて力尽きてしまうそうです。鮭は、必ず生まれた川で卵を産むそうです。

アイヌの人々は、鮭をすべて使い、少しも捨てないそうです。身は、チマチェブ（焼き魚）・ルイペ（解けるもの）氷頭や内臓は、チタタフ（たたき）、粗はオハウ（汁物）に使い、皮はチェブケレ（皮靴）に使っていたそうです。

アイヌの人々はとても物を大切にしていると思いました。

今回の2泊3日のキャンプを通して自然の力や物の大切さを学びました。

これからの生活では今回学んだことを生かし、ごみを出来るだけ減らし水を節約するなど環境に気をつけて行動したいと思います。

## 坂井 壯多 〔札幌第3団〕

アイヌの生活を見て、印象に残っているのは、やはり自然の大事さでした。

アイヌが自然を受け入れ、共存してきたように、私たちスカウトも自然のことを考え、自然とともに活動していかななくてはならないことでしょう。

そしてこの意志は周りの人にも伝えていかななくてははいけません。そのために今回、アフターフォーラムとして、「語り部」が設けられました。次はこの活動に全力で取り組もうと思います。

多量なことを学んだ分、考えさせられることも多くあり、フォーラムではそれらを基に議論が弾み、とても充実していた。今後もこういう活動形式が増えていっても良いと思う。

また、他地区の話聞いて思ったことは、やはり、スカウト同士のネットワークの不備であった。全国フォーラムや日韓フォーラム、道フォーラムの存在さえ知らなかったスカウトもあり、これは地区から各団へ、そして各隊、各スカウトへ情報が回っていないのだ。そのため、ベンチャースカウト同士の横の繋がりも広げないと北海道のベンチャースカウトは活発化しないと思った。

あと、今年の冬に福島に行ったスカウトが何名かいて、交流を行いました。僕も2年前に北海道・東北ブロックベンチャーフォーラムで岩手県の被災地に行った経験があります。なので、場所は違えど、僕が行った時と比べ、被災地の状況や、そこに住んでいた人たちの心境の変化を聞くことが出来ました。それに、僕は地震と津波の話だけでしたが、福島の原子力発電所のことについてもいろいろ聞くことが出来ました。とても良い意見交流会が出来たと思います。

今回の経験を生かし今後もスカウト活動に精進していきたいと思います。

## 村田 雄 〔函館第3団〕

村木さんが蝦夷松と榎松の見分け方について教えてくれました。

その見分け方とは「どーでも“えーぞ松”と天まで“とどけ松”」です。榎松は天まで届くよう枝がまっすぐです。しかし蝦夷松はどーでもいいので枝の先端が少し曲がっています。勉強になりました。

「今回のキャンプを振り返り、我々は何をなすべきか」についてフォーラムをした。

フォーラムの中では「アイヌは自然を受け入れるからすごい」、「アイヌは鮭を余すことなく使ってすごい」

などといった感想があげられ、「ごみの再利用」、「自然破壊をなくす」といった事をこれからして行こう、という意見が出た。

今回のキャンプを通して自然の厳しさを知り、またその中で育まれる自然の恵みを授かることについて感謝する、ということを知った。そして、この体験を活かして「我々は何をなすべきか」ということを考え、行動に移して行こうと思った。

今回のキャンプのテーマであった「自然に感謝して生きる」とはどういうことなのかを知ることができました。また今回のキャンプで得た経験を今後の生活、スカウト活動に活かしていきたいと思います。

#### 川端 司 〔札幌第9団〕

今回私はアドバイザーとしてベンチャーのつどいに参加させて頂き、2日間を通してアイヌ民族の文化や生活を体験したことがとても貴重な経験となったのではないかと感じています。

アイヌの人達が自然を大切に扱っており、衣食住を自然と共に過ごしているという知識は持っていたのですが、それ以上にアイヌの人達は様々な知恵や文化を継承していたことを知り驚きました。

また、アイヌの人達は必要な道具を木や動物の骨といった素材から作りますが、木の固さやしなやかさといった特徴を把握して銚や丸太船を作っていたということから1つ1つ試行錯誤を重ねて経験を積むことの大切さも学ぶことが出来たのではないかと感じました。

アドバイザーとしての反省は周りを見渡して先の状況を予測して動くことが出来なかった点、そして状況の変化に臨機応変に対応して、スカウトに指示を出すことが出来ていなかった点などがあったのではないかと考えました。

そして何より自分のスカウト技能や経験の不足も感じるきっかけでもあり、アイヌの人達のように縄の扱いや、自分で必要なものを補うといった技能を私も身につけるべきであることだと感じました。

私達は自然によって生かされている存在です。そして自然に無駄はなく、命は循環して廻るのだということ、生かされている自然に私達は感謝を忘れてはならないのだということを知ることが出来たのではないかと感じています。

まだ2～3年も経っていない東日本大震災等でも示されたように、私達や科学といった技術は自然に合わないのだということを知りました。

そこから自然を大切にすることと同時に、災害といったことが起きた際への野営技術の向上といった準備や訓練、知識が求められているのではないかと考えられます。

そして今回のつどいの経験だけではなく、これまでのスカウト活動や、自然災害といった経験を基に新しく知識や経験、対策を身につけなければならないのではないかと振り返ってみて感じました。

私達は自然によって生かされている存在です。自然をただ利用するだけではなく、守る活動もまた重要なことであると思います。

アイヌの方々のように様々な経験や知識を試行錯誤しながら身につけ、今後のスカウト活動をより活発的に、深みのあるものになりたいと思います。

#### 樋口 大樹 〔札幌第12団〕

今回のキャンプは成功した計画だと考えます。

学ぶことや経験したことが多かったことはもちろん、スカウトたちにとってもほかの地区で活動している仲間の姿を会議場ではないところで見ることによって大きな刺激を受け、活動がより発展すると思われるからです。

他の地区のスカウトの技能を直接見て、言葉を交わし、親交を深めることによって得られるものは、まとめた提言文以上の価値があると思います。

ここで生まれた交流をそのまま沈静化させず、各スカウト同士の交流を深めて楽しい活動を計画し、北海道のベンチャー活動を盛り上げて欲しいと思います。

## 「平成25年度北海道ベンチャーのつどい」総括～決意～

自然災害の猛威を受けた東日本大震災の後、我々は何をなすべきか考え行動してきました。

今回のベンチャーのつどいでは、自然の脅威を知り自然に感謝する、アイヌの生活文化から『自然に感謝して《生きる》』ことを学びました。

そして、私たちの心の糧であり、日々実践しなければならない「ちかい」と「おきて」の全てが、「アイヌの生活文化」の中に込められていることに、驚き、深く感銘を受けました。

「いろいろなものを神様としてあがめ、大事にしている」

「自然を受け入れて共存している」

「生きるために必要なことは全て自分でしていた」

「動植物全ての命がつながっている」

「無駄の無い生活をしていた」

現在の我々は、豊かな物質や作られたものに慣れてしまい、自然と離れた存在であり、人間というものはいかに小さく、そして自然というものはいかに大きいものなのかを痛感しました。

北海道の地名の大半が、アイヌ語からきているように、私たちの生活の知恵が「アイヌ文化」から伝承されています。

私たちは、今回体験した貴重な経験を多くの仲間に語り伝え、全ての物、特に食べ物については「命をいただいている」感謝の気持ちを抱き、自然の恵みに感謝し自然と共に生きる術を磨きます。

このことにより、自然災害から自分たちと他の人々の身を守ることに寄与します。

### ＝アクションプラン＝

#### 1 コンセプト

自然や道具などの様々なものには神々が宿っていると考えており、命のつながりを考え、無駄のない生活を送っているアイヌの人々が伝えてきた、自然や物に対する考え、知恵を活かした生活体験を実践することにより、野営技術の幅を広げる。

#### 2 テーマ ～自然と共に生きる～

自然と共存し自然を活かして、徹底的に無駄を省いたキャンプを行い野営技術の幅を広げる。

#### 3 方法

- (1) 道内のベンチャー隊やベンチャースカウトのソロもしくはグループで、一人ひとりが自然について考える～自然を感じるキャンプ～を試行することを要請する。
- (2) これらの試行を踏まえて、アイヌの生活文化・知恵を借りて「徹底的に無駄を省き、自然と共存し自然を活かすキャンプ」について、北海道連盟の指導、支援を受けて、道内のベンチャースカウトから公募するプロジェクトを構成して研究する。
- (3) この研究結果をもとに、北海道連盟の側面的な支援、指導を得て、プロジェクトメンバーの主体的な企画・運営により『非常時を想定して、自然と向き合うキャンプ』を行うことを北海道連盟に要請する。

#### 《『非常時を想定して、自然と向き合うキャンプ』のイメージ》

◇ アイヌの生活文化から学ぶ野営

◇ 従来行ってきたキャンプと異なり、極力「物」を規制して自然を活かしたキャンプを行い、物と命の有り難さを学ぶ

【例】寝る：自然の物を活かした「寝る場所」を作る

食べる：水道水を使わない。ガス類を使わない。火種は絶やさない。

食材は可能な限り自然の物を有効に使い、端材等のゴミは出さない。

炊事用具・食器類も工夫する。

暮らす：携帯電話等電子機器は使わない。

◇ 期間：3泊4日間程度

◇ 期日・会場：諸条件を考えて、プロジェクトと北海道連盟で検討する。

# 第55回 全道スカウティング研究協議会

＝子どもたちの興味関心を触発して深まりのあるプログラムを開発しよう＝

## 〔趣 旨〕

ボーイスカウト教育の特質は班制度による子どもたちの自発活動を支援します。

しかし、先有経験の薄い子どもたちには、様々な体験・経験の場を提供すると共に、潜在的な興味・関心を掘り起し自ら学ぶ（顕在的学習行動）きっかけを作る指導者の触発作用が重要になってきます。

3年間継続して研究協議を進めてきた「プログラム開発」の集大成として、どこの地域でも実施可能な『パン作り』『木工作』やマスコミで話題になっている『山の水族館』、そして全道でのスカウティングの共通テーマである「エコなスカウティング」にもとづき『イトムカ鉱業所の産業廃棄物処理』の体験・見学を通じて、「子どもたちの興味・関心を触発して深まりのあるプログラム開発」を研究協議します。

## 〔期 日〕

体 験：平成25年10月26日（土） 14：00～17：00

研究協議：平成25年10月27日（日） 9：00～11：00

## 〔会 場〕

北見市留辺蘂町

体 験：農業交流センター花えーる 《パン焼き体験》

果夢林の館クラフト体験工房 《木工作体験》

野村興産イトムカ鉱業所 《エコなスカウティング》

研究協議：塩別つるつる温泉

## 〔研究協議〕

「体験・見学」で、指導者が楽しみ、学びました。

この“楽しみ、学び”を、スカウトたちへ、どのように伝えればよいのでしょうか。

この“楽しみ、学び”を、プログラムへの位置づけ・発展に、どのような工夫をするとよいのでしょうか。

スカウトたちの自発活動を尊重・奨励しますが、社会経験は未熟です。

指導者が“楽しみ、学んだ”事を、スカウトたちの自発活動にどのように触発するとよいのでしょうか。

同じ、素材（体験・見学）をもとに、ビーバー、カブ、ボーイ、ベンチャー（ローバー）と一貫教育のスカウティングを行うため、各部門のプログラム企画・展開の視点が異なることを理解し、部門が連携したプログラム開発の可能性を考え、自隊（団）の活動プログラムを作成します。





## パン焼き体験

発酵済みの素地から「ウイナーパン・チョコチップパン」の「成形・焼き」の体験および小麦の種類、小麦を使った食品についての学習を通じて、スカウトを触発するプログラムを考える

高野 みどり ALT

今回「食」をテーマとしたパン焼き体験を通じてプログラムプランのアイデアが数多く出たのは、楽しむこと、学ぶことができた成果である。

各自が作成したプログラムを発表しあうことで、新たな発見もあり、良い刺激も受けることができたと思う。

小麦粉についていうならば、テーマを与えるやり方もあれば、自由な発想でやる気をおこさせる方法もある。

食べ物の大切さを知り、自然から恵を頂いていることに気づけば食べ物を大切にすることにもつながる。

例えば「焼く」ことで考えるなら、スカウトが自分で生地を捏ねて、それを焼いてみて、初めて自由な発想が生まれる。

「遊び」のなかで、疑問や興味が湧いてくる、それと同じことである。そこから「調べる」ことにつながり、そして新たな発見により知識が身に付く。さらに食べ物を大切にすることも伝えたい。失敗から学ぶこともたくさんあることも。

焼く道具に関しては、オーブンレンジはもちろん、石窯、ダッチオーブン、フライパン、炊飯器、牛乳パック、ファイヤーの火（ツイスト）などの意見がでた。

以下、考えられるプログラムをリストアップしてみた。

- 1 豆に拘って、自分たちで開発してみる。
- 2 野菜や果物などを使い、想像を膨らませる。
- 3 闇鍋ならぬ闇具材パンを作ってみる。
- 4 小麦生産農家から小麦の生育を学び地域交流へつなげる。
- 5 主食がパンの国を調べ、世界に興味を持たせる。
- 6 ビーバーやカブでは、やなせたかしの「アンパンマン」を通じて、やさしさや勇気、夢について考える。
- 7 ボーイ以上であれば、技能の向上や食を通じて自然を大切に、生きることを学ばせる。
- 8 高度な専門分野では小麦の成分、品種、流通、歴史、生産国を調べ、道産小麦を訪ねる旅をするのもよい。



## 木工作体験

魚の形をくりぬいた木型で、糸のこ、サンダー、ドリルを用いてチーフリング作製を通じて、スカウトを触発するプログラムを考える

飛鳥 慶子 ALT

木工作体験コースでは、糸ノコ、サンドペーパー、電熱ペンを用い、各々真剣な表情で魚のチーフリングづくりを体験しました。完成するまでの気持ち、それを指導して下さったスタッフの方々への感謝。これらを感じて過ごした時間だったと思います。

研究協議では、今回素材とした「木」や「魚」から連想するものを思いうかべてみました。

その後、スカウトが体験するときの気持ちをたいせつに各部門のプログラム作りをし、部門内で共有しました。

部門間の話では年代に応じた道具や使い方、スカウトへの教え方など、話よりも実技のほうが伝わるようで、ロープも登場しました。

集会の部分として作成したプログラムですが、活動の目的によってこれを基に具体的な計画がいくつも出来そうです。さらに、いろいろな意味で「ゲームとして競う」部分にアレンジすれば、スカウトは成長して、やがて来る「競争」もゲーム感覚で捉えられるかもしれません。そのくらい多様なプログラムが揃いました。

今回出来あがったBVS・CSのプログラムを交換してBS・VS向けに作り変える、またBS・VSのプログラムをBVS・CS向けに…という工夫も可能でしょう。

団や地区の別部門のプログラムを自隊のプログラムに作り変えてみてはいかがでしょうか。

他のリーダーと一緒に作業をしてみれば、お互いさらに深まりのあるプログラム作りが楽しめると思います。

◇ スカウトが体験する時の気持ちを大切に、プログラムを作る。

◇ 連想させる事で、プログラムが広がる。

「木」に関するもの、連想するものを考え、活動する

家、まき、植樹、自然、小鳥、健康、木工品のやわらかさ、緑

木登り、玩具、樹木の大切さ ⇒ 木工 ⇒ 道具

ガスボンベ1本分と同等の燃料は、どのくらいの木を消費するのか

小さな動物（昆虫）、トロッコ電車、レトロな乗り物

「魚」に関するもの、連想するものを考え、活動する

船、栄養、漁礁、さしみ、鯉の滝登り、小川にかかる橋、五月の節句

◇ スカウト技能をどう取り入れるか。



<p><b>エコな スカウティング</b></p>	<p>全国屈指の「蛍光灯」「電池」の処理工場を見学し、水銀、ガラス、鉄、アルミ、亜鉛、マンガンなどの産業廃棄物処理・リサイクル工程を見学しスカウトにエコなスカウティング展開のヒントを提供する 電池の部材が肥料原料にリサイクルされ海外に輸出している！！</p>
-------------------------------	---

村上 政義 ALT

見学した工場のもつ意味が多岐にわたり、この素材（見学）からすぐにプログラムへの作成に移ることは難しいと考え、初めに協議を行いました。

参加者の皆さんからは、特にリサイクルや環境保全など多くの意見が出されました。

リサイクルについては乾電池や蛍光管の仕組み・中身に視点を当て、スカウトに疑問を持たせることなどのアイデアが出てきました。

各種あるリサイクル施設を組・班で分かれて調査し、CSならば壁新聞を作って隊集会で発表、BSならば新たなアクションにつなげるといったプログラムを考える参加者もいました。

乾電池や蛍光灯などの品物を商品として購入・消費し、回収・処理から廃棄もしくは再生の道についてBVS～VSの中で分けながら部門を通して物の循環を考え、プログラム化したらどうかといった意見も出されました。

さらに、環境につながるプログラムとして、なぜ乾電池を分けるのかという疑問をBVSから考えさせることによって、上の部門で具体的に深く考えていく（例 BS：水俣病，VS：環境破壊など）という案も出てきました。

その他にも乾電池から「エネルギー教育」に取り組むことも可能であるし、家電リサイクルにつなげていけるというアイデアもありました。

初めに協議したことで、部門に固執せず、スカウト教育の一貫性をおさえながらプログラムを考えることができたのはよかったと思いました。

参加者のみなさんが、組・班集会から隊集会の意識を強く持っていて、作成されたプログラムを見てみると、一つの集会の流れとしてではなく、組・班集会から隊集会にどうつなげていくかというものになっていたようです。

今回いろいろな部門の指導者が、一つの素材について考えていくのはとてもよい取り組みだったと感じました。

各部門がそのスカウト年代の特性に合わせてプログラム化する事の重要性や、部門が上がっていくことによってプログラムの深まりや拡がりを持たせていけるということをよく理解することができました。





# 若駒弥栄



2014 新春 誌上賀詞交換

謹賀新年

北海道議会議員 [釧路市]

**小畑 保則**

北海道議会ボーイスカウト育成議員協議会

謹賀新年

北海道議会議員 [札幌市北区]

**道見 重信**

北海道議会ボーイスカウト育成議員協議会

スカウトの仲間を増やして  
運動の拡がりを！！

北海道連盟 先達 顧問

**三浦 武**

赤平市

北海道連盟維持財団 常任理事  
北海道連盟 相談役  
北海道スカウトクラブ 副会長

**入部 道之**

新年！弥栄！！

留萌地区

留萌第1団 団委員長 櫛井 二三夫

留萌第2団 団委員長 下田 満

秩父別第1団 団委員長 寺迫 公裕

羽幌第2団 団委員長 小寺 克彦

稚内第2団 団委員長 前田 義彦

地区協議会長 櫛井 二三夫

地区委員長 三国 久介

地区コミッショナー 小笠原 祐治

新春弥栄！

北海道連盟地区選出理事 留萌地区委員長

**三国 久介**

あけましておめでとうございます

## 胆振地区

### 一 地区役員 一

地区協議会会長	滝口 信喜
地区協議会副会長	熊野 正宏
地区委員会委員長	高橋 忠義
室蘭第1団 団委員長	高橋 忠義
室蘭第4団 団委員長	田中 洋一
登別第1団 団委員長	木原 靖之
伊達第1団 団委員長	辻 正博
苫小牧第2団 団委員長	永井 承邦
コミッショナー	村中 啓子
副コミッショナー	月館 良治
事務 長	小笠原 貢
事務 次 長	渡邊 昌彦
地区 会 計	佐藤 公英
総務委員会副委員長	亀岡 富信
スカウト委員会副委員長	松橋 恵一
リーダー委員会副委員長	猪股 瑞彦
プロジェ外委員会副委員長	西岡 浩
地区 監 事	鷲沢 義則
地区 監 事	津田 和明

### 一 北海道連盟役員 一

地区選出理事	高橋 忠義
副 理 事 長	下田 好徳
名 誉 会 議 員	高木 康
相 談 役	高田 道夫
参 与	大沼 勝美
参 与	塩谷 真守
参 与	佐藤 公英

事務局 〒050-0065

室蘭市本輪西町3丁目22番12号

電話・FAX (0143) 55-2876

新年のお慶びを申し上げます

## 石狩地区

顧 問	原田 裕
顧 問	越中 勉
地区協議会長	箱島 盈
地区委員長	小林 幸治
地区副委員長	高塚 浄正
地区副委員長	林 謙治
事務局 長	猪股 巖
事務局 員	猪口 信幸
地区コミッショナー	飯田 康弘



## 謹賀新年

上川地区委員会

地区委員長 小西 恒

地区コミッショナー 佐々木 篤美

## 謹賀新年

スカウトの目線で活動しよう!  
日本ボーイスカウト北海道連盟 理事長

長岡 正彦

## 謹賀新年!

今年もよろしくお願いたします

ボーイスカウト北海道連盟

札幌第9団

育成会長	岩佐 眞
育成会副会長	北野 義城
団委員長	樟本 賢首
副団委員長	北野 和

# 謹賀新年

## 旭川地区協議会

顧問 高橋 晃久  
顧問 野原 典雄  
顧問 川村 武雄  
顧問 森 豊

地区協議会長 松倉 信乗  
地区委員長 高橋 明  
地区副委員長 山口 淳  
野営行事委員長 山口 淳  
リーダー委員長 町田 清  
組拡広報委員長 由良 和喜  
野営場管理委員長 天満 昇  
財政委員長 仙座 猛  
会計 金澤 利寛  
事務長 浅野 玲子  
監事 菅原 エミ子

地区コミッショナー 村上 政義  
副地区コミッショナー 宮澤 多佳子  
副地区コミッショナー 西能 由理子  
副地区コミッショナー 杉田 肇

第55回全道研での「研修」と  
おもてなしはいかがでしたか

# 謹賀新年

ボーイスカウト  
北網地区協議会  
会長 桜田 正文

# 新春弥栄

ともに“光の路”を歩みましょう！

十勝地区

## 帯広第4団

育成会長 渡邊 伸夫

団委員長 尾張 景



指導者・スカウト一同

謹賀新年！  
スカウトに尽くす組織・運営を！

日本ボーイスカウト北海道連盟  
副理事長 前田 和道

謹賀新年！  
スカウトに楽しいプログラムを！

日本ボーイスカウト北海道連盟  
副理事長 下田 好徳



◇ 県連提供プログラム

イランカラッテ：アイヌ文化紹介パネル展示とムックリ演奏体験

来場者の状況 433名

国内	19県47班 (グループ)	364名
国外	8国・地域 15グループ	69名

- ◇ 期間中の山口県豪雨災害に対して、参加スカウトが義援金を集め、山口県連派遣団に寄託。ジャンボリーニュースで紹介されると共に、山口県知事から礼状が寄せられた。
- ◇ 23WSJ参加にどのようにつなげるかが課題。

**【平成25年度ベンチャースカウトのつどい】**

- ◇ 参加者数。  
スカウト11名（8個団） 指導者7名。道内各地区から参加することが望まれる。
- ◇ 「活動記録集」を作成し、参加スカウト・指導者及び協力機関・団体に配付。  
北海道連盟ホームページに掲載
- ◇ 全面的に部外機関、団体と連携した事業で、内容面も充実し効率的な運営ができた。
- ◇ 参加スカウトから提言された「アクションプラン」の実現を支援し、事業趣旨の継続を図る。

**【第55回全道スカウティング研究集会】**

◇ 参加者数

参加者総数	80名 (スカウト関係者77名)
参加団	24個団 含む泉1団
交流会・懇親会	80名
宿泊者	75名
昼食	67名

- ◇ 研究協議での「プログラム事例集」を作成し北海道連盟ホームページで紹介。
- ◇ 北網地区の全面的な協力・支援のもと開催でき、地方開催の意義が図られた。
- ◇ 26年度も地方開催を継承し、今回行われた“実務・体験”を伴う、プログラム充実に寄与する全道研に発展させる。

**【スカウトの日】**

◇ 集計表

参加状況		実施プログラム (回数：複数回答)					
団	参加者数	環境	社会奉仕	国際貢献	招待	大震災	リジナル
20個団	309人	15	3			1	7

回収されたゴミの内訳 (取り組んだ団数)					回収された数量		
タバコ 吸殻	食品 包装容器	ペットボトル 缶・ビン	破片・針金 釘	雑貨・家具 家電	空き缶	ペットボトル	合計
14	11	15	5	1	288	191	479



# 平成26年度 北海道のボーイスカウト運動推進 基本方針と重点項目

## ～検討素案～

平成26年度の「北海道のボーイスカウト運動推進」の基本方針、重点項目は、地区コミッショナー研究集会、理事会での協議を経て年次総会で決定されますが、常任理事会では次の検討素案を提案します。団、地区において検討・協議をお願いします。

### 【基本方針】

- 1 班制教育の徹底によるプログラムの充実
- 2 隊・団活動の充実
- 3 23WSJ参加機運の醸成

### 【重点項目】

#### 1 班制教育の徹底によるプログラムの充実

(1) 全ての隊・団で活動目標・教育目標を立て実践する

(2) 指導者研修の充実

① CS・BVSテキスト活用の実務研修実施（含む訪問研修）

② ボーイスカウト講習会、カブ課程研修所、コミッショナー研修所開設

種別	期日		開催地
ボーイスカウト講習会	年間6回		各地区
WB研修所CS課程 北海道第47期	平成26年5月4日（日） ～5月6日（火）3連休	2泊3日 舎営	札幌市
コミッショナー研修所 北海道第9期	平成26年11月1日（土） ～11月3日（月）3連休	2泊3日 舎営	札幌市
安全セミナー	平成26年11月9日（日）	1日間	札幌市

③ 全道研の開催

3年間継続したプログラム開発を見直し、隊・団活動に即役立つ実務研修的な内容を想定

④ パトロールシステム研修会の継続開催検討

(3) カブラリーの開催 平成26年9月13日（土）～15日（月）

札幌市南区滝野「青少年山の家」ほか

(4) ベンチャープロジェクトの推進

#### 2 隊・団活動の充実

(1) 「中期展望」を素材にした、隊・団・地区活動・運営の“気づき・見直し”活動を展開（含む訪問・交流）

(2) 一般の方々も参加するボーイスカウト講習会、青少年育成研修会、関連事業等の開催  
（地区主催もしくは道連主催により地区で開催）

(3) 道連に隊・団・地区支援体制を構築

#### 3 23WSJ参加機運の醸成

=TOPICS=

**【新規加盟者数前年比143%】**

平成25年11月30日現在、全道でスカウト127名、指導者33名、合計160名が新規加盟登録して、前年度末比142.86%の新規加盟登録者があり、減少前年度比166名をクリアする状況です。26年度の継続登録において、退団者の減少に努め前年度末の登録者数を確保しましょう。

[平成25年11月30日現在]

**《新規加盟者数》**

スカウト											
ビーバー		カブ		ボーイ		ベンチャー		ローバー		計	
25.11末	前年度末	25.11末	前年度末	25.11末	前年度末	25.11末	前年度末	25.11末	前年度末	25.11末	前年度末
58	49	58	31	11	7	0	0	0	1	127	88

指導者						合計		前年度対比
隊指導者		団委員その他		計		25.11末	前年度末	
25.11末	前年度末	25.11末	前年度末	25.11末	前年度末			
23	17	10	7	33	24	160	112	142.86%

**《加盟登録状況》**

※北海道では900人のスカウトが、450人の指導者のもと、  
350人の団委員等の支援を受けて活動しています。

	地区数	団 数		隊 数		加 盟 員 数		
		対前年度	対前年度	対前年度	対前年度	前年度比		
北海道	11	51	-1	173	-11	1,709	-166	91.15%
全 国	232	2,306	-80	9,490	-363	126,055	-8,083	93.97%

	ビーバー			カブ			ボーイ		
	隊数	スカウト数	指導者数	隊数	スカウト数	指導者数	隊数	スカウト数	指導者数
北海道	29	97	70	45	287	140	48	283	130
全 国	1,806	10,674	5,530	2,121	21,548	10,748	2,187	21,290	8,007

	ベンチャー			ローバー			内訳合計		
	隊数	スカウト数	指導者数	隊数	スカウト数	指導者数	スカウト数	指導者数	団委員数
北海道	43	176	93	8	63	16	906	449	354
全 国	1,991	11,053	4,283	1,385	8,794	2,201	73,359	30,769	21,927

**【制服の変更は2015年世界ジャンボリーから】**

日本連盟では制服の変更を検討しています。現時点での変更案は各地区事務長にお示ししてありますので、ご覧ください。

変更時期は、2015年の第23回世界スカウトジャンボリー（23WSJ）参加者のみ着用して、2015年秋から順次販売の予定です。

## 【部門のプログラムの見直し】

今日の時代状況に応じたプログラムの見直しが検討されています。

主な検討事項は、ビーバー・カブ部門が学年進級やステップ章の完修章化などで、平成27年4月から施行で準備が進められています。

ボーイ、ベンチャー部門では、初級から富士章までのシームレス化、進級課目、技能章等の見直しが検討されています。

## 【カブスカウト隊・ビーバースカウト隊 楽しい集会 テキストとDVDの活用を！！】

北海道連盟では、カブ・ビーバーの活動の充実を図るための「集会の方法」「プログラム事例」などをハウツー的に解説したテキストと基本訓練のDVDを作成し、刊行しました。

テキストとDVDセットで1,000円です。北海道連盟事務局にお申し込みください。

「北海道連盟ビーバー・カブ プロジェクト」では、隊・団への訪問支援を行います。

トレーナーやプロジェクトメンバーが、このテキストとDVDをもとに集会の組み方、プログラム企画の知恵など隊・団の状況に即して、指導者の方々と共に考えアドバイスします。

派遣要請を北海道連盟事務局にお申し出ください。

## 【平成26年度継続登録締め切りは3月15日（土）】

平成26年度の継続登録は、1月8日（水）から登録システムで受付となりますが、3月下旬は登録システムが年度更新のため、休止となりますので北海道連盟の平成26年度継続登録締め切り日は3月15日（土）とします。

期日厳守のうえ、加盟登録申請をされますようお願いいたします。

日本連盟に登録料、北海道連盟に分担金を納入して継続登録が完了となり、「そなえよつねに共済」は、登録が完了しないと補償されませんので、ご注意ください。

なお、平成25年度の追加登録は3月下旬まで受付されます。1月8日以降「追加登録」と「継続登録」の処理を間違わないようにお願いします。

## ＝編集後記＝

◇ 「今でしょ!」「倍返し」「じぇじぇじぇ」が昨年の流行語大賞に選ばれましたが、「中期展望」を素材に、これからのボーイスカウトを考えるのは“今でしょ”。そして豊かなプログラムを子どもたちに“倍返し”して、保護者や地域社会の皆さんに“じぇじぇじぇ”と言われるような、スカウティングを提供しようではありませんか。

◇ 保護者による幼児・児童虐待、仲間同士による陰湿ないじめ、携帯やネット依存とこれらに伴う犯罪など子どもたちを取り巻く悲しい話題がマスコミを賑わしています。

また、教育制度の改革で子どもたちにどのような影響を与えるのでしょうか。

優れた教育システムと運動理念で、子どもたちの幸せを願って活動している私ども指導者は、社会的な動きに視野を広げ関心を持ってボーイスカウトの教育運動を推進しようではありませんか。

◇ 家庭生活から医療・福祉、産業界まであらゆる所でロボットが活用されています。最近では1体のロボットが多様な機能を果たす「双腕ロボット」の開発が進んでおり、このロボットの特徴は「協調調整」できる頭脳を持っているとのことです。

私たちのボーイスカウト運動においてもこの「協調」する「調整機能」を有効に活用することによって、豊かな活動が展開するのではないのでしょうか。

斧の響き 147号 (平成26年1月1日発行)  
発行・印刷：日本ボーイスカウト北海道連盟／発行責任者：北海道連盟 理事長 長岡 正彦  
〒062-0934 札幌市豊平区平岸4条14丁目3-40 北海道ボーイスカウト会館内  
Tel 011-823-7121／ Fax 011-814-9377 E-Mail bs-douren@bz04.plala.or.jp  
北海道連盟公式HP <http://www.bs-douren.org/>